バカとテストと桃太郎

NYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと桃太郎

【Ｎコード】

Ｎ８５４７Ｎ

【作者名】

ＮＹＯ

【あらすじ】

突発的テキトー小説第四弾。むかしばなし。

（前書き）

この小説の見方。

雄二と翔子が桃太郎のお爺さんとお婆さんだったら?、という台本をみんなでやっているという設定、かな?

基本的に駄文なんで温かい目で見てください。

むかしむかしあるところに子供のいない老夫婦が住んでいました。

「おばあさん。やけに近い気がするんだが」

「……雄……おじいさん、私たちは長年連れ添った夫婦」

お爺さんは坂本雄二、お婆さんは霧島翔子。住んでいる場所は山奥の小屋なのに、夫婦別姓というやけに近代的な老夫婦でした。

ある時、お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんはそのお爺さんの後をつけました。

「おばあさん。川へ洗濯に行ってくれないか？」

「……行ってくる」

お爺さんが呆れた表情で言うと、お婆さんはしぶしぶ川へ洗濯に行きました。お婆さんがお爺さんの下着をそれはそれは念いり洗濯をしていると，どんぶらこどんぶらこっこと川上からたくさんの桃が流れてきました。

「……雄二の履いていたもの……」

しかしお婆さんはお爺さんの下着に夢中で流れてくる大量の桃に気が付きません。

「（ちょ、ちょっと！霧島さん！）」

「（……ごめん）」

お婆さんは、慌てて一つ拾って食べてみると大変美味しかったので、お爺さんに持って帰ろうと考えました。ところがたくさんあってどれにしていいか迷ってしまったので、

「……うまい桃はこっちへ来い。苦い桃はあっちへ行け」

と声をかけたところ、大きくてうまそうな桃が寄ってきました。その桃を拾って家へ持ち帰りました。

晩になってお爺さんが薪を背負って戻ってきたので、お婆さんは言いました。

「……なんで柴を刈りに行ったのに薪を持ってるの」

「違う！これはそう言う物語でぐわぁぁあぁっ！！」

頭の中で考えられる限りの拷問をした後に、お婆さんは今日の出来事をお爺さんに話しました。未だに出血の止まらないお爺さんは、

「よし、その桃を食べよう」と言いました。

「お婆さん。台所から良く切れる包丁を持って来てくれ」

「……わかった」

お婆さんはお爺さんがいつ浮気してもいいように常に鋭い切れ味を維持している包丁を渡しました。お爺さんはそれを苦笑いで受け取って、桃をまな板にのせて大きく包丁を振りかざしました。

――パシッ

すると，桃が割れて中からかわいい男の子が生まれたので驚いてしまいました。

「雄――お爺さん、桃を切るにしてはやけに力が強いね」
「すまないな。出血で力加減がわからないんだ」
男の子は生まれながらにして真剣白刃取りのスキルを持った猛者でした。うっすらと頭から赤い水が流れてるのは桃の果汁でしょうか？
「……私たちの子」
お婆さんはこれは大変と、湯を沸かして産湯で体を洗い、着物を着せました。二人は桃から生まれた子なので――
「……男の子だから『こしょう』」
「ここは『桃太郎』にしとけ」
「……でも……」
「諦めろ」
――桃太郎と名付けました。
桃太郎は1杯食べれば1杯、2杯食べれば2杯分，粥や魚をたくさん食べて桃太郎は大きく育ちました。
しかし、1つ教えたら前に教えた1つを忘れるという残念な子でした。
10年後、小さかった桃太郎も大きくなりました。
「お爺さん、いい加減お婆さんのほうに籍を入れれば」
「……霧島雄二（ポッ）」
「冗談でも言わないでくれ」
毎日のように続く桃太郎とお婆さんの攻撃。これにはお爺さんもた

まりません。すくすくと育つ桃太郎と対照的に、お爺さんは毎日病んでいきました。

ある時、遠くの方から鬼が来て、村人たちを困らせていることを聞いたお爺さんは、

「わかった。俺も男だ。真剣に考えようじゃないか」
「……雄二」
「僕も嬉しいよ。二人が結婚してくれるなんて」
「だがその為の資金は俺の力で出したい」
「……別にいいのに」
「これはけじめだ。ちょうどいい具合に今『鬼』が暴れまわっているそうだ。ヤツらは財宝を貯め込んでいるから、俺はお前との結婚資金の為に退治に行く！」

鬼退治という名目でお婆さんから逃げる事を企てました。

鬼退治に出かける日、お婆さんはお爺さんにに新しい着物を着せ、袴をはかせて、頭にはちまきをまかせ、『妻帯者』と書かれた旗を持たせました。

「……浮気しないように」
「せめて鉢巻きの『翔子ＬＯＶＥ？』は止めてくれ……」

そして，吉備団子をたくさん作って腰にぶら下げてやりました。

お爺さんは村のはずれでやけに胸が貧相な雌犬と出会いました。

「お爺さん。どこ行くワン？」
「鬼退治に行くんだ」

「じゃあ、腰に付けてる日本一の……」
「（きびだんご、だ）」
「吉備団子を１つくれたら家来になるワン」
お爺さんは考えます。
「盾ぐらいには使えるか？」
「ちょっと！なんでそんな後ろ向きなのよ！」
お爺さんは「しまった」と、慌てて口を閉じました。けれども犬は怒った表情を崩しません。
「おーじいさん、おじいさん。お腰に付けた吉備団子。１つわたしにくださいな」
犬が歌を歌ってせがむので、仕方なくお爺さんはきびだんごをあげました。
「ほらよ、這いつくばって食え」
「性格捻くれてるわね」
お爺さんはＳでした。
お爺さんは犬を連れて旅を続けます。山の奥深くに入るとサルがやってきました。
「……きびだんごくれキー」
「えらく簡単だな、おい」
事情を知らない人が聞くと、まるで物取りのような言葉を喋る猿で

した。とはいえ、猿は意外とすばしっこそうです。
お爺さんは尋ねました。

「仲間になってくれないか」

なんて丁寧な言葉ではなく

「お前が本当に欲しいのは吉備団子か？」
「……！！」

お爺さんは見た瞬間から猿が何を望んでいるかを見抜いていました。
そういう事に関してはお爺さんは野生の本能を持っているのです。
事実、猿は少したじろぎました。
お爺さんはそれを見越してこう言いました。

「これ、だろ？」

懐から取り出したのは、お爺さん秘蔵の一冊です。

「……おーじいさん、おじいさん。お腰に付けた××××。１つわたしにくださいな」

長年連れ添ってきた相棒を猿にあげて、お爺さんは猿をお伴にしました。その時、二人の間に家族の絆よりも深い絆が出来たのは言うまでもありません。

二人の家来を伴ってさらに山を抜けたお爺さん。平坦な道を歩いていると、今度はキジが飛んできました。

「……なんでアタシがこの役なのよケン」

キジは何故か怒っていました。

「まぁ、そう怒るな」

お爺さんはこれ以上怒らないようにたしなめます。

「もういいわ。早く吉備団子をくれケン」

「オーケー。了解だ」

お爺さんは溜息をつきながら、腰につけている吉備団子に手を伸ばしました。しかし、その時ピタッっと手が止まりました。いくらたってもキジが歌を歌わないのです。

「（おい、どうした？）」

「早く吉備団子をくれケン」

「（だが、お前が歌わない事には）」

「早く」

「……」

お爺さんはキジに吉備団子をあげました。

そして、犬に日本一の旗を持たせて鬼ヶ島へ向かいます。

「あれが鬼ヶ島か……」

船に浮かぶ絶海の孤島。切り立った崖の上に鬼の顔を模した岩が立っている場所。

そう、お爺さんたちは目と鼻の先まで迫っていたのです。けれど、周りは海に囲まれていて泳いで渡ることはできません。

お爺さんは思いました。

「このまま旅を続けていれば帰らなくていいんじゃないか？」

そうです。このまま旅を続ければ、お伴の食事代はかかりますが、お婆さんからは永遠に逃げられることができます。お爺さんは考えます。お伴の食事代を稼ぐのと、お婆さんと桃太郎からの陰険な結婚攻撃。どちらが自分にとって辛く苦しいのかと。

「お爺さん、旅の人ですか？」

道の真ん中に腕を組んで悩んでいると、ピンクの髪を持った女性が声をかけてきました。

「ああ、そうだが」

「何かお困りのようですが？」

「実はいま人生の岐路に立たされていてな」

「？」

随分遅い岐路だな、と若い娘は思いました。

「あ、そうでした」

そう言うと懐から一枚の紙を取り出しました。

「探し人の似顔絵です。さっきお婆さんが配り歩いていたんですよ。この人見たことありますか？」

「どれどれ……ほぅ、これはマズイな」

そこにはお爺さんの似顔絵が描いてありました。ですがあまりにも美化されていたので娘は気がつかなかったのです。それでもお爺さ

んが気づけたのは、似顔絵は『翔子ＬＯＶＥ?』の鉢巻きをしっかりしてたからでした。

「決まった」

「え？　何がですか？」

「俺は鬼を退治する！」

お爺さんは逃亡資金を貯えるために鬼ヶ島に向かいます。

近くで船を借りてお伴を連れて鬼ヶ島に向かいます。木でつくられた簡素な船ですが、お爺さんはそれでも行こうとします。「櫓（ろ）」を四つ貰えたのでお爺さんが二つ、犬に二つ渡してじっくり進みます。

え？　なんで犬かですって？

「……おぇ」

猿は乗り物に弱かったのです。

鬼ヶ島に着くとサルが大きな門をたたきました。すると中から鬼が出てきました。

「何のようだ」

筋肉隆々な鬼が訪ねてきます。肌が少し黒い所を見ると、鬼ヶ島は日差しが強いのかもしれません。

「鬼退治に来たから覚悟しろ」

「ほう、それはいい度胸だな」

鬼はお爺さんを見降ろします。お爺さんも決して目を逸らしません。

「ふん、お前らなど俺が相手をするまでもない。お前ら！来い！」
鬼が右手を上げると、門の奥から子鬼がたくさんでてきました。上はタンクトップ、下は短パンで上下とも虎柄。おへそは丸出しという露出満点の格好でした。
小鬼は、出てきた瞬間お爺さんたちに襲いかかります。

「お姉さまーーっ！！」
「ちょ、ちょっと美春！」

お爺さんたちはこの攻撃に慌てます。さすがは”鬼”。瞬発力は目を見張るものがあります。
ですが、そこはお爺さんが選んだ精鋭たち。すぐに反撃の狼煙を上げます。
どんなに速く動いても捕まえてしまえば関係ないのです。

「秀吉、なんでアタシがこんな恰好であんたがそんな良い役なのよ」
「あ、姉上ちがっ！　その関節はそっちの方向には曲がらっ！！」

お爺さんたちは戦います。たとえ血が流れても戦い続けます。

「ムッツリーニ君。実はボク。今日はスパッツも履いていないんだ」
「……（ボダボダ）」

出てきた子鬼を全て倒し、残るは最初にいた筋肉隆々な大きい鬼だけです。
満身創痍のお爺さんは、それでも立ちあがります。この鬼を倒せば（自分にとって）平和な未来が待っているからです。

「よく倒したな」

どこかで見ていたのでしょうか。大鬼は子鬼が全てやられたのを見届けてから悠々とでてきました。お爺さんは大鬼と対峙します。

「では、行くぞ」

お爺さんは持っていた良く切れる包丁を片手に大鬼と戦います。しかし、さすがはボスというだけあって子鬼とは比べ物にならない強さです。身体がボロボロになりながらお爺さんは戦います。

「ふむ、もういいか」

「？　なんの話だ」

肩で息をしながらお爺さんは尋ねます。けれどその質問に鬼は答えず、顔を上げました。その視線はお爺さんの後ろの方に注がれています。

すると後ろから声が聞こえてきました。

「……もういい」

「なっ！？」

お爺さんは目を見開きました。動揺が隠しきれませんでした。そこにいたのは他の誰よりも時を共有し、他の誰よりも愛した人だったからです。

「なぜお前がここにいる……お婆さん！！」

前に鬼がいることを忘れてお爺さんは後ろを向きます。長い黒髪を携え、凛とした表情をしたお婆さんが立っていました。

「……全部、ウソ」
「ウソ、だと」
「最初から最後まで芝居だったんだよ。お爺さん」

お婆さんと鬼はグルだったのです。勇敢で優しいお爺さんなら、きっと悪いことをしている奴らを懲らしめに行くだろうというお婆さんの策略でした。
お婆さんは諸葛孔明の生まれ変わりだったのです。

お爺さんは考えます。ならなぜお婆さんはこういう事を計画したのかと。
お爺さんを傷つけるため？　財宝を狙わせるため？
さまざまな案が浮かんでは消え、消えては浮かびました。
そして、お爺さんは一つの考えが浮かんだと同時に船へと走り出しました。

「ウソ……だろ」

そこで見たのは残骸となった船と逃げ去る犯人の後ろ姿。
後ろ姿だけでもわかります。お爺さんは犯人を１０年間も育ててきたんですから。

「……捕まえた」

愕然としたお爺さんにお婆さん手錠をかけました。

ガチャガチャ

「（ん？　翔子？　これ本物じゃないか？）」

「（……本物じゃなきゃ意味がない）」
「（いやいや待て待て。これはお芝居であってだな。本物を使う意味なんか）」
「（……歩く）」
「（翔子。俺の目に狂いがなければあれは猛獣用の檻だと思うのだが）」

こうして、お婆さんは末永くお爺さんと暮らしましたとさ。

めでたしめでたし

（後書き）

タイトルに間違いがあったので修正します。

バカとテストと桃太郎、改め、俺と演劇と苦難の日々

できれば本編。僕と未来と平行世界（パラレルワールド）の方にも目を通して下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8547n/

バカとテストと桃太郎

2010年10月11日18時36分発行